

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 7 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。



<https://youtu.be/wIXTFjUSQ3E?si=mfqO18lzNdTGmovf>

随分前の事と思うが、『ここは何処にあるか』と書いた。もっとも『ここ』と『意識』は同じなのか、同じだとしたら如何『同じ』なのか、亦違うとするなら、如何に違うのか、それは自分にも未整理のままでいる。好きな言葉 Conscious Capitalism 2016 年の秋に、米国で開かれる流通業態についてのセミナーに参加した時、講師の稔子・ウイルソン女史から聞いた言葉で、自分の中では雷に打たれたような衝撃だった。以来、今も月に数通はメールで遣り取りをしているが、先月号の『父について』と言ってくれたのも、この女性である。Conscious というのは意識と訳しているのだが、上の画像の意識が同じ概念で言っているのかどうかは分からない。Senses というのも意識と言えば意識で、こちらは Feelings に近いのかも知れない。もっとも、英単語に対する感覚の受け取り方も、私には今ひとつみんなと共有出来ているとも思わないが。

意識が身体を形成している細胞、では無い事は確かな事のように思うと、もともと意識が脳にある訳がない。感じる場所は確かに脳かも知れないが、だからと言って在り処とは次元が違う。次元が違うというと変に聞こえるが、厳密には脳にもあるが、『脳の中にだけある訳ではない』が正確な定義付けに思える。

頭の中がどうなっているのかと、ひとから言われることがある。その時の応える常套句は『空っぽ』。どれだけ考えても、これ以上の答えは見つからない。記憶も、脳の中に実は無いのではないかと思い始めた。脳は記憶をたどる装置で、脳の中に記憶が眠っているのではないような気がする。パソコンの Data はハードディスクに眠っているらしく表現されている。だけど『本当かなあ』と思う。思うが保存したからと読み込む事は常にしている。この通信だって、今はメモリと呼ばれるところで動かしていて、間もなく上書き保存というアイコンをクリックする。そうすると次に読み込みの様なアイコンなりコマンドを使ってモニター上に呼び覚ます。さすれば、パソコンに意識はあるのか。

自ら学習要綱を作成して成長するコンピューターを搭載したロボット(手足のあるなしに係わらず)が、人間の代わりに労働をする時代が、直ぐ近くまで来ているそう。これも先と同じセミナーで北海道の社長が、朝ホテルで見せてくれた書籍が切っ掛けで、レイ・カーツワイルの著書を手にした。その事が今回は問題ではない。問題ではないが行き掛けの駄賃として、寄り道しておくと、学習能力と自立型の意識とは、やはり区別があるのではないかと思う。

今は新緑が神々しく、いよいよ本体へその活動の所得を還元していく季節。真夏の太陽光を浴びてその隆盛期を迎える。そして秋風が吹く頃にはその葉としての 1 年の役目を終え、自ら本体と繋がっている箇所を膜を張り、そして落葉して行く。ポイントは、本体が遮断するのではなく、葉が膜を張るところ。それは落ち葉を拾って見れば分かる。これを自然現象として片付けるにはあまりに意識に欠ける。本体である樹は葉を使い捨てている訳ではない。この自ら命を絶つ事に、私が想像するに、意識は外界と一体で存在している。

では、次世代ロボットは外に存在する意識を共有する事は出来るのだろうか。コンピューターもその作者、共に過ごす者が、その意識の何者であるかを認識し、理解していれば、その事を学習する可能性はある。鍵は此处にあるような気がするが、おそらく必ずしもそうはならないだろうと思う。我が家のお掃除ロボットは家のレイアウトを認識し、見取り図を作成して任務に役立てる。漏れなく掃除を済ませると、エネルギーである電力の供給を受ける基地に帰還する。この彼が彼女かは、自分が老衰して役目を終える時、自ら命を終えるだろうか。

不思議な事が2度あった。自分はいつも車と共に仕事をしている。1台は、ひと月ほどなだめすかさないと始動しなかった。いよいよ明朝新しい車に乗り換えるというその夜、車庫に戻った。次の朝には、どうしてもエンジンが稼働しようとしなくて、牽引車に引かれて車庫を出て行った。もう1台、20年共にした車は15km程度離れたところでエンジンが愚図ついた。既に44万kmも走っていた。アイドリングが利かない。アクセルを離すとエンジンがストップしてしまう。『何とか無事、我が家の車庫迄連れ帰ってくれ』と頼み、ルートを頭で検索し、上り坂で停車しないで済むルートを探した。後2〜300mの地点で、登り切れればOKという交差点に差し掛かった。しかしそこは自転車の往来が多いところだった。案の定、自転車が増えて、停車するしかなかった。果てどうするか。ブレーキを踏んでいなければ、車は下がる。だけど、アクセルを離すとエンジンは止まる。何かの時にヒール&トゥという技を読んだことがあった。そうするしか無かった。人が訝し気に観ている。焦る顔を隠して、そうして難を逃れた。やはり次の朝は、車屋さんが来ても、エンジンは音無しの構えだった。

電気と鉄の塊に過ぎない自動車が意識を共にするかどうか、だからと言って自信は無い。でも、少なくともこの2台は自分を助けてくれたことは確かで、意識を共に出来たと考えている。無生物にも量子は働きかけるのか。量子の存在を詳しく知る以前から、こうした事は現実であり、あるという限りは、いずれ物理学が科学としてそれを証明すると捉えてきた。

記憶しているのは30歳の時、新潟県の山奥に住んでいて、樵の仕事をしていた。冬は雪で閉ざされ仕事が無くなる。それで滋賀県の工場に出稼ぎに来た。友人から般若心経の写経をしている事を聞いた。出稼ぎだから、生活が無いに等しい。そこで、自分も写経をする事にした。実家が近いので子供の頃の書道の道具を取りに行った。母親が訳を聞くので『写経』と言うと、あろうことか上質の半紙を1000枚、書きやすい細筆5本と共に送って来た。礼を言うと『千枚すればいい』『そうすると、世界は貴方のものになる』だった。『?????』『あなたの思う通りに世界は動く』と言う。『それは悪くはない』と思うのが当然。間もなくして次第に、そして確かに思うようにまわりが動き始めてきた。数えていないが、その事で千枚に近づいて来ている事が自覚出来た。

これはいい、と思って、その筆のメーカーを探すと、大阪市内だったので、出掛けた。そこで毛氈を何枚かと細筆も数本買い求めて、そして袖触れ合う数人にも薦めて、手本と半紙百枚、細筆1本と毛氈に横に14段、縦に20列の升目を入れて贈っていた。般若心経は、空海も認める秘儀に満ちている。写経をしていれば、菩薩の境地が身体に染み込んで来る。世界は太陽系が爆発して出来たようにエネルギーに満ちている。母親が言った事は、紛れもなく、このエネルギーが自身の中を行き来するという事だった。この世界を創造したエネルギーが身の内と同期する事は、『空』の状態も、『色』の状態も、同時に在りのまま在る事になる。

だから、世界が自分の思うようになるのではなく、自分が世界の在り様に染まり、自分が世界の部分になる、だった。もちろん、意識だけではない。肉体も考えてみれば一部に過ぎない。鉢の中を泳いで、水が生み出す有機物を餌にしているメダカと変わらない。みんな此处に集約していく。思った通り、事実の後追いをしている物理学は、こうして精神世界に踏み込んで、『違わない』と、立証性を以って説明を始めた。意識は脳の中に、も存在する。自らの目的が、この宇宙の目的と同じになれば、それや世界は思いのままになる。

有限会社アルファー 吉田清一郎